



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「格助詞+動詞」構造を持つ助詞相当句をめぐって：テ形と連用中止形の差異
Author(s)	池上, 素子
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 10, 1-17
Issue Date	2006-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45658
Type	departmental bulletin paper
File Information	BISC010_001.pdf



「格助詞＋動詞」構造を持つ助詞相当句をめぐって

－テ形と連用中止形の差異－

池 上 素 子

要 旨

「～に関して、～に対して、～を通じて」のような、格助詞に動詞がついて、意味・機能上ひとまとまりになっている表現(本稿では助詞相当句と呼ぶ)には、「～に関して」のようなテ形と、「～に関し」のような連用中止形の両方を備えているものが多い。従来、両者の違いについては文体差以外ほとんど言及されてこなかった。本稿では、両者の間には文体差以外に統語的な差異があることを指摘する。統語的な差異とは、1)「だ／である」による述語化、2)「の」の後接、3)取り立て助詞の後接、4)「なら」の後接、5)格助詞「より」の後接、の5点である。これらについて、テ形では可能な場合が多いが連用中止形では許容されない。ただし「テ形では可能な場合が多い」と述べたように、これらの点が必ずしも全ての助詞相当句のテ形で可能であるというわけではない。文中における各助詞相当句の振る舞いは画一的ではないのである。本稿では助詞相当句毎の振る舞いの違いをも記述し、その背景について考察する。

【キーワード】 助詞相当句、テ形、連用中止形、述語化、助詞の後接

1. はじめに

日本語を学ぶ外国人学習者は、主に中級以降で「～に関して、～に対して、～において、～を通じて、～をめぐって」のような様々な表現を学ぶ。本稿の表題にある「『格助詞＋動詞』構造を持つ助詞相当句」とは、このような、格助詞「に、を」等に動詞がついて、意味・機能上ひとまとまりになり、全体として一語の助詞的機能を果たしている表現のことである。従来、これらの表現は、複合辞、複合助詞、後置詞等の名称で呼ばれ、未だその定義、呼び名は確立していない¹⁾。本稿では、全体で助詞的機能を果たす句であると見なせることから、助詞相当句と呼ぶことにする。

これらの助詞相当句には、「～に関して」のようなテ形と、「～に関し」のような連用中止形の両方を備えているものが多い²⁾。両者の用法が酷似しているため、これまで、その違いについては文体差以外にはほとんど言及されてこなかった³⁾。本稿では、これらの助詞相当句の多くに認められる、テ形と連用中止形の文体差以外の違いについて考察する。そのことは、これまでの日本語文法記述の不足を補うだけでなく、日本語を学ぶ外国人に対する日本語教育にも有用であると考ええる。なお、以下では、「～に関して」のような助詞相当句をテ形、「～に関し」のような助詞相当句を連用中止形と呼ぶ。

2. 本稿が対象とする助詞相当句

本稿は、「～に関して／関し」のように「格助詞＋動詞」から成る助詞相当句のうち、テ形と連用中止形の両方を備えており、かつこれまで文体差以外の違いが言及されてこなかったもの（つまり、文体差を除けば全く同等であると見なされてきたもの）を考察の対象とする。しかし、一口に助詞相当句と言っても、上述したように、その定義、呼び名は確立していない。様々な表現形式の中で、どれが単なる語のつながりで、どれが助詞相当句なのかを峻別することは極めて困難である。本稿では、

- ①国立国語研究所編（1951）『現代語の助詞・助動詞一用法と実例一』秀英出版
- ②森田良行・松木正恵（1989）『日本語表現文型 用例中心・複合辞の意味と用法』アルク
- ③木下直子他（1995）『辞書で引けない日本語文中表現』北星堂書店
- ④グループ・ジャマシイ編（1998）『日本語文型辞典』くろしお出版
- ⑤藤田保幸・山崎 誠（2001）『現代語複合辞用例集』国立国語研究所

の5冊のうち3冊以上に収録されている項目を取り上げた。この5冊を取り上げたのは、目下のところ助詞相当句をまとまった形で扱っているのは管見ではこれらだけだからである。この内の3冊以上で扱われていれば、一般性の高いものと見なすことができ、ひとまとまりの句と認められると考えた⁴⁾。

このようにして選定した結果、本稿が対象とする助詞相当句は以下の通

りとなった。

- | | |
|------------|---------------|
| ・～に応じて／応じ | ・～にかけて／かけ |
| ・～に関して／関し | ・～に対して／対し |
| ・～につけて／つけ | ・～にとって／とり |
| ・～によって／より | ・～にわたって／わたり |
| ・～を通じて／通じ | ・～を通して／通し |
| ・～をめぐる／めぐり | ・～にあたって／あたり |
| ・～に際して／際し | ・～に先立って／先立ち |
| ・～につれて／つれ | ・～にしたがって／したがう |

1.で述べたように、これまで、テ形と連用中止形の違いについては文体差以外ほとんど言及されてこなかった⁵⁾。しかしながら、これらの助詞相当句の中には、テ形と連用中止形とで統語上の違いがいくつか認められるものがある。そしてそれらは、テ形では多くの場合可能だが連用中止形では許容されないというものである。言い換えれば、連用中止形に見られる制約とでも言うべき事柄である。以下で、それらの事柄について述べる。

3. テ形と連用中止形の統語上の違い

3.1 述語化

テ形と連用中止形の多くに認められる統語上の違いの一つは、「だ／である」による述語化ができるか否かという点である。以下、例文文末の（ ）は出典の略号である。出典のないものは筆者の作例である。また、*は明らかに不自然で文として成り立たないと考えられるものを、?は文として成り立たないほどではないがいささか不自然に感じられるものを表す。下線、および出典のある例文中で*が付いている語句は、特に断りがない限り引用者である筆者の手による。なお、煩雑になるため全ての助詞相当句について例を挙げることはしていない。

- (1) 癢に障ったが、それは、彼に対してよりも、むしろ僕自身 に対して／*に対し だった。(月と六)
- (2) 「テレポーテーション によって／*により ですよ」(ブン)

上のように、テ形は「だ／である」によって述語化できるものが多いが、連用中止形ではそれはできない。

3.2 助詞の後接

テ形と連用中止形の違いの二つめは、テ形には以下に挙げるような様々な助詞が後接できるものが多いが、連用中止形には後接できないことである。

第一に、名詞に係る際、「～に関する」のように連体形を使う場合もあるが）テ形は準体助詞「の」を従えて「～ての」という形を取ることができるものが多い。このことは先行研究にも書かれている（日本語教育学会編（1982）、松木（1990）、藤田・山崎（2001）等）。しかし、連用中止形には「の」をつけることができない。

- (3) こうした、スポーツ ｛を通じて／＊を通じ｝ の親善はかなりあると私は思っている。（藤田他）
- (4) これが、光秀がひそかにいただいた、詩 ｛を通して／＊を通し｝ の義秋評である。（国盗り）

第二に、テ形には「は、も、だけ、しか、のみ、さえ」等の取り立て助詞が後接できるものが多いが、連用中止形には後接できない。

- (5) ただモスクワ ｛に関して／＊に関し｝ だけは、一月前のニュースは、既にニュースではない。（風に）
- (6) 親方の芳兵衛 ｛にとって／＊にとり｝ は、なにより「芳古堂」の名が大切なのだ。（さぶ）
- (7) 誰でも自分の眼 ｛を通して／＊を通し｝ しか人生を見やしない。
（モオ）
- (8) 契約などというのは、こじれはじめたら大して意味のない語句ひとつ ｛をめぐって／＊をめぐり｝ さえ、際限なくこじれていくことがある。（一瞬）
- (9) サービスプロバイダが現在だけでなく、将来 ｛にわたって／＊にわたり｝ もネットワークを柔軟に構築できるようにします。（コリ）

第三に、テ形には接続助詞「なら」が後接できるものが多いが、連用中止形には後接できない。

- (10) 『だまし討ちと暴力とは、だまし討ちと暴力 {に対して／＊に対し}なら正当なお返しだよ！』ヒンドリーは叫びました。(嵐が丘)
- (11) 一月から二月 {にかけて／＊にかけ}なら暇だけど。

第四に、テ形には比較を表す格助詞「より」が後接できるものが多いが、連用中止形には後接できない。

- (12) 偽善が他の人を破滅させるのは、偽善そのもの {によって／＊により}よりも、そのうちに含まれる阿諛によってである。(人生)
- (13) 能力 {に応じて／＊に応じ}よりもその会社の景気の具合とか世の流れとかの影響の方が大きいから金額からだけではその人の能力はかりきれないな。(個人)

このように、助詞相当句には、テ形には可能だが連用中止形には許容されない事柄があり、両者の違いは文体差のみではないことがわかる。ただし、テ形には可能であるとしてここに挙げた項目が、全てのテ形に当てはまるわけではない。以下で、この点について述べる。

4. 述語化および助詞の後接について

4.1 各助詞相当句における振る舞いの違い

3.で述べたように、テ形と連用中止形の違いとは、概ね、統語上テ形には可能だが連用中止形では許容されない事柄があるという、連用中止形に関する制約である。しかし、3.でテ形に可能なこととして挙げた項目が、全てのテ形に当てはまるわけではない。すなわち、テ形の中にも上の制約が該当するものがあるということである。そこで、可能なものとそうでないものを助詞相当句ごとに下の表1にまとめる。

表1の、「＋である」「＋の」等は、当該助詞相当句に「である」をつけて述語化することができるか、また「の」を後接することができるか等を意味する。「＋取り立て」は取り立て助詞（「は、も、だけ」等）の後接を指す。○は可能なことを、×は許容されないことを、？は許容されないと

までは言えないが、そのような文は作りにくいと思われることを示す。例えば、「に应じて」の「+である」に○がついているのは、「～に应じてである」という文が可能であることを示す。逆に、「にかけて（対象）」の「+である」に？がついているのは、「（名誉等）にかけてである」という文は作りにくいということを表している。各句に対応している連用中止形については、全ての項目において許容されないため表には記載していない⁶⁾。なお、「にかけて（終点）」とあるのは「1月から2月にかけて～」のような用法であり、「にかけて（対象）」とあるのは、「名誉にかけて」のような用法を指す。また、「に対して（対象）」とあるのは、「質問に対して答える」のような用法であり、「に対して（対比）」とあるのは、「日本海側は雪が多いのに対して、太平洋側は雪が少ない」のような用法を指す。

上述したように、表1に挙げたテ形に対応する連用中止形については、ここに挙げた項目全てが許容されないため記載していない。したがって、表中で×がついている項目は、テ形でも連用中止形でも許容されないものである。一方、○のついている項目は、テ形には可能だが連用中止形には許容されないものであり、？がついている項目は、テ形では許容されにくく、連用中止形では許容されないものである。

表1 《述語化および助詞の後接について》

	＋である	＋の	＋取り立て	＋なら	＋より
に应じて	○	○	○	○	○
にかけて（終点）	○	○	○	○	○
〳 （対象）	？	○	○	○	×
に関して	○	○	○	○	○
に対して（対象）	○	○	○	○	○
に対して（対比）	？	×	×	×	×
にとって	○	○	○	○	○
によって	○	○	○	○	○
にわたって	○	○	○	○	○
を通じて	○	○	○	○	○
を通して	○	○	○	○	○
をめぐって	○	○	○	○	○
につけて	？	？	○	×	×

にあたって	?	○	○	○	?
に際して	?	○	○	○	?
に先立って	?	○	○	○	?
にしたがって ⁷⁾	?	×	×	×	×
につれて	?	?	?	?	×

この表から、テ形と連用中止形との間に差異があることだけでなく、同じテ形でも、可能な項目が多いものとそうでないものがあることがわかる。以下では、このような助詞相当句における振る舞いの違いがどこから生じているのかについて考察する。

4.2 動詞との関連

これまで述べてきた助詞相当句のテ形と連用中止形の違いのうち大部分は、動詞のテ形と連用中止形の違いにも当てはまることである。以下に動詞の例を挙げる。(14)~(17)にあるように、テ形では述語化、「の」、取り立て助詞、「なら」の後接が可能だが、連用中止形ではできない。

- (14) 太郎の印象では、親爺というものは、いつも本を読んでいるが、ただしそれは 寝転がって／*寝転がり} である。(太郎)
- (15) 二六時中 昔の時刻の制で一昼夜を十二時(刻)にわけ、その明け六つと暮れ六つ(朝夕の六時)を 合せて／*合せ} の意味で、一日中、一昼夜の意。(こころ)
- (16) 自分は音楽家だから、思想や感情を音を 使って／*使い} しか表現出来ない、とたどたどしい筆で、…(後略)(モオ)
- (17) 鏡に 向かって／*向かい} なら、スンナリ言えるんだがなあ……。 (女社長)

したがって、3.で述べた違いは、各助詞相当句を構成する元々の動詞のテ形と連用中止形の違いを反映したものと見ることができる。しかし、それだけで助詞相当句におけるテ形と連用中止形の違いの原理を説明することはできない。例えば、動詞の場合、格助詞「より」は連用中止形はもとよりテ形にも付かない。

- (18) 最近の子供は、箸を{*使って／*使い} よりフォークを使って食べる方が上手だ。

また、4.1の表にあるように、テ形であっても述語化や助詞の後接が許容されない（またはされにくい）ものもある。一方で、連用中止形であっても制約を受けないものもある（注6）参照）等、単純に動詞のテ形と連用中止形の性格がそのまま表れた結果とは言い難い。以下で、テ形でありながら制約を受ける句について、その背景を探る。

4.3 機能の観点から

まず、テ形でありながら制約が多い句として、「～にしたがって」「～につれて」がある。これらは、下のように不自然になる場合が多い。(20)はインターネット上の個人のホームページにあった文で、原文では「につれて」が用いられていたが、筆者の語感ではいささか不自然に感じられる。

- (19) 硫黄の濃度が上がるのは火口に近づく{|?にしたがって／?につれて|}である。
- (20) ラストに向かう{|*にしたがって／?につれて}の愛の燃え上がりは美しく、…（後略）（個人）
- (21) この現象は気温が高くなる{|*にしたがって／?につれて}は起きない。
- (22) もしこの現象が起きるのが、二酸化炭素が増加する{|*にしたがって／?につれて}なら、これを防ぐことは可能である。
- (23) 平均寿命が延びる{|*にしたがって／*につれて}より出生率の低下の方が高齢化社会を進める要因となる。

また、対比を表す「～に対して」も下のように制約が多い。(24)はインターネット上の個人のホームページにあった文だが、筆者の語感ではいささか不自然に感じられる。

- (24)?たとえば田中真紀子氏は、(中略)ほとんど責任が追求されていない。
石原慎太郎都知事や森元総理が厳しい追及にさらされてきたのに対してである。（個人）

- (25)* 日本人が集団主義的であるのに対しての中国人の個人主義的思想
- (26)* 三菱自動車が不振にあえいでいるのに対してはトヨタは絶好調である。
- (27)* 今までのカメラにフィルムが必要であるのに対してならデジカメにはフィルムが要らない。
- (28)* 日産が売れているのに対してよりトヨタはそれ以上に売れている。

さらに、「～にあたって」「～に際して」「～に先立って」も、「～にしたがって」「～につれて」「～に対して(対比)」よりは少ないものの、(29)、(33)のように許容されにくいものがある。

- (29) 天皇陛下からお言葉を頂戴したのは開会する {?にあたって／?に際して／?(の)に先立って} だった⁸⁾。
- (30) それから基一郎はたいそう親切に開業に際してのこまごました注意を与えた。(楡家)
- (31) だから信長は、岐阜城改修にあたっては、城よりもむしろ住居に力を入れた。(国盗り)
- (32) 卒業にあたってなら、将来の自分を好きなように描きなさい。(個人)
- (33) この資格は、就職する {?にあたって／?に際して／?(の)に先立って} より転職する際に役に立つ。

これらに共通するのは、いずれも接続助詞的な働きをしている句である
と見なせる点である。厳密に区別することは難しいが、全ての項目で可能
である「～に関して」「～にとって」等が、基本的に名詞について述語と
の関係を示す格助詞的な働きをするのに対し、「～につれて」「～にしたがっ
て」「～にあたって」「～に際して」「～に先立って」は、例えば「一行が
頂上に近づくにつれてガスが濃くなってきた」のように、節と節を結び複
文を形成することが可能であるという点で接続助詞的である。「～に対
して」についても、対象を表す「～に対して」に比べ、対比を表す「～に
対して」は接続助詞的機能を果たしていると考えられる。対象を表す「～
に対して」は、表1の通り、述語化、助詞の後接が可能であるが、対比を表
す「～に対して」では不自然である。このように、程度の差はあるものの、
接続助詞的な働きをする助詞相当句の方が、格助詞的な働きをする助詞相

当句よりも連用中止形と同じく制約が多くなるという傾向があると言える。

4.4 意味の観点から

次に、やはり制約が多いものとして、「～にかけて(対象)」「～につけて」がある。「～にかけて」は、「1月から2月にかけて～」のような終点を表す用法では全ての項目で可能であるが、「名誉にかけて～」のような対象を表す用法では、(34)、(38)のように許容されない(またはされにくい)場合がある⁹⁾。

- (34) 今度の試合には絶対勝つ。チャンピオンのプライドにかけてだ。
- (35) 思いつきにかけての天才が、若い旅職人の中に今日ではもういなくなったというわけではない。(車輪)
- (36) のみならず数ある同級生のうちで、経済の点にかけては、決して人を羨ましがる憐れな境遇にいた訳ではないのです。(こころ)
- (37) 私は学生時代には学友会卓球部でならしたので、卓球にかけてなら若い皆さんにも負けません。(個人)
- (38)*思いつきにかけてよりも根気の良さにかけて彼の右に出る者はいない。

また「～につけて」も許容されない(またはされにくい)ものが多い。⁽⁴⁰⁾は「～につけての」の例だが、このような文語調の文以外では「の」も共起しにくいのではないか。

- (39) あいつは本当にいい加減だ。何事につけてだ¹⁰⁾。
- (40) 折々の季節につけての源氏のあわれふかい手紙。(新源氏)
- (41)*喜びにつけてなら酒を飲んでもいいのではないか。
- (42) 「それにつけても、お金、頂戴」(太郎)
- (43)*喜びにつけてより悲しみにつけて酒を飲むことが多い。

「～にかけて(対象)」「～につけて」がこのように不自然になる場合があるのは、これらの語句が慣用的に用いられることが多いためではないかと思われる。「～にかけて(対象)」は、「名誉、誇り、メンツ、信頼」等

社会的な体面に関わる語について、それらを失わない決意・覚悟等を表す文脈か、ある対象に関して「自信がある、ひけをとらない」等プラス評価を下す文脈でのみ用いられる。また、「～につけて」も「何事、何か」等ある特定の語を受けて慣用的に用いられることが多い¹¹⁾。すなわち、これらの語句はそれが用いられる文脈がほぼ決まっているため、慣用性が高く、生産性が低いのではないかと考えられるのである。

テ形と連用中止形の違い、および句によって振る舞いが異なるという現象が何に起因しているのかについて考察する上で、ここまで述べたこと以外にも示唆的な事柄がある。それは、「～ごとに」という意味を表す「～につき」の振る舞いである。「～につき」は、本文では考察対象に含めなかったが、唯一連用中止形で述語化および助詞の後接が可能な助詞相当句である（注6）参照）。しかし、これが「～に関して」という意味を表す場合、述語化も助詞の後接も許容されない。同じ連用中止形であるにもかかわらず、制約を受けたり受けなかったりするのとは、「～ごとに」という意味を表す「～につき」が、「～に関して」という意味を表すそれよりも日常よく用いられるようになった結果、機能語化し、動詞の連用中止形としての性格が薄れたためではないかと推測される。これも、考察する際の一つの手がかりとなる可能性がある。

このように、どのような句が制約を受け、どのような句が制約を受けないかについては、単純に動詞のテ形と連用中止形の性格がそのまま表れた結果とは言い難く、様々な要素が影響しあっていると考えられる。しかし、4.2から4.4で述べたことがどのように関連し合っているのか、また他にどのような要素があるのか等については今後の課題である。

5. 終わりに

以上、助詞相当句のテ形と連用中止形の統語上の違いについて述べ、さらに句によって振る舞いが異なる背景について考察してきた。本稿で述べてきたことをまとめると以下ようになる。

- 1) 助詞相当句のテ形と連用中止形の違いは従来指摘されてきた文体差だけではない。両者には統語上の違いのあるものが多い。それは、テ形では多くの場合可能だが連用中止形では許容されないという、連用中止形に関する制約である。

2) テ形では多くの場合可能だが連用中止形では許容されない点とは以下の5点である。

- a) 「だ／である」による述語化
- b) 「の」の後接
- c) 取り立て助詞の後接
- d) 「なら」の後接
- e) 「より」の後接

3) ただし、全てのテ形において a) ～ e) が可能なわけではない。a) ～ e) が可能なのは格助詞的な働きをする助詞相当句であり、接続助詞的な働きをする助詞相当句や、慣用的な用いられ方をする助詞相当句では許容されない（またはされにくい）ものがある。

初めに述べたように、助詞相当句のテ形と連用中止形については、これまで文体差以外にはほとんど言及されてこなかった。したがって、日本語学習者は、テ形と連用中止形には文体差以外の違いはないと指導されてきたと考えるのが自然である。しかしそれでは、学習者が誤用を犯す恐れもあり、また、テ形についてより多様な使い方ができるにもかかわらず単調な文を生成し続ける可能性もある。本稿で得られた知見は、これまでの文法記述の不足を補うだけでなく、日本語学習者の誤用を防ぎ、より多様な文の産出を促す上で有意義であると考ええる。

注：

- 1) 永野 (1953)、砂川 (1987)、松木 (1990)、塚本 (1991) 等は複合辞、複合助詞と呼んでいる。一方、鈴木 (1972)、金子 (1983)、高橋 (2003) 等は後置詞と名付けている。呼び方が一致している場合でも、その定義、認定の仕方は研究者によって異なり、未だ確定したものはない。なお、認定基準等の問題点については、福島 (2002) に詳しい。
- 2) 一方の形しか備えていないものとしては、例えばテ形しか持たない「～において」「～を以て」や、連用中止形しか持たない「～をはじめ」等がある。
- 3) 例えば、『日本語文型辞典』の「により」の項目には、『によって』の書きことば的な言い方」とある。
- 4) ただし、呼び方は文献によって異なる。森田・松木 (1989) と藤田・

山崎 (2001) は「複合辞」という用語を用いている。国立国語研究所編 (1951) では「連接形式」、「呼応形式」といった呼び方がなされており、木下他 (1995) では「文中表現」、グループ・ジャマシイ編 (1998) では「文型」と呼ばれている。このように、呼び方は文献によって異なるが、各々が指しているものは同等であると認められる。

- 5) 文体差以外では、「～に限って／限り」と「～について／つき」の意味上の違いが指摘されている。「～に限って／限り」については藤田・山崎 (2001) に、「～について／につき」については森田・松木 (1989)、グループ・ジャマシイ編 (1998) に記述がある。
- 6) 本文では取り上げていないが、唯一連用中止形で述語化および助詞の後接が可能なものに「～ごとに」という意味を表す「～につき」がある。

- (a) 今日提出の社会学理論のクラスの宿題、わたしは全部で3ページくらいがちょうどいい長さだと思っていた。ところが、友達がそれは1問につきだと言ってきたのだ。(個人)
- (b) 上記しつけ教室料金は、1レッスン (約1時間) につきの表記となっております。(個人)
- (c) 1メールアドレスにつきは5MBです。(OCN)
- (d) なんで一枚につき500円? 一回につきならわかるが…。(個人)
- (e) 利用料金は、一回につきより一時間につきでつけた方がいいと思う。

しかし、同じ「～につき」でも、「～に関して」の意味の場合、下のようにならなくなる。

- (f) 話題は、哲学 { について／*につき } だった。(コン)
- (g) 彼はワイン { について／*につき } は詳しいが、日本酒 { について／*につき } の知識は皆無だ。
- (h) さらにそれに加えて重労働ということ { について／*につき } なら、(中略)おびただしい労働者の魚のような眼を思えば、なにもいえなくなる。(パニック)
- (i) 彼は文学 { について／*につき } よりも、むしろ写真やデザインについて語ることが多くなっていた。(パニック)
- 7) これは「上昇するにしたがって気圧が下がる」のような相関関係を表す用法の場合である。同じ「～にしたがって」でも、「法にしたがっ

て行動する」のような「～の通りに、逆らわずに」という意味を表すものの場合、下のようにテ形で、述語化、「の」、取り立て助詞、「なら」の後接が可能である。

- (a) 神は前進しておられますが、私たちの小さな尺度 にしたがって／＊にしたが^いい ではありません。(個人)
- (b) それぞれの建物では指令 にしたがって／＊にしたが^いい の業務が行われているが… (後略) (個人)
- (c) この法則 にしたがって／＊にしたが^いいこそ、はじめて真実の音に出会うことができるのです。(個人)
- (d) あくまでも研究分担者の指示 にしたがって／＊にしたが^いいならよいのでは……。 (信州)
- (e) 親の助言 ＊にしたがって／＊にしたが^いい より友達の意見にしたがって行動する子供が多い。

しかし、「法にしたがって行動する」のような文における「～にしたがって」を助詞相当句に入れるか否かについては文献によって判断が揺れている。「～にしたがって」は2.で本稿が参考にした文献のうち、森田・松木 (1989)、木下他 (1995)、グループ・ジャマシイ編 (1998)、藤田・山崎 (2001) の4冊で取り上げられているが、このうち「法にしたがって…」のようなものをも表現の一つの用法として記載しているのは木下他 (1995)、グループ・ジャマシイ編 (1998) の2冊で、後の2冊には相関関係を表す用法のみ挙げられている。また、記載している木下他 (1995) でも、「基の動詞『従う』の意味に近い使い方です」とある。「法にしたがって…」のような文における「したがって」は、「逆らわず、言いなりになる。ついていく」という実質的な意味を色濃く残しており、(f)のように「に」との間に他の語の挿入が可能で、(h)のように活用、肯否、テンス等も残している等、相関関係を表す「～にしたがって」の「したがって」とは対照的である((g)・(i)参照)。これらのことから、本稿では、「法にしたがって…」のような文における「したがって」は本動詞と見なす。

- (f) 私の指示にだけしたがっていれ^ばいいのだ。
- (g)＊時間が経つにだけしたがって薬の効果が薄れる。
- (h) 上司の指示にしたがわないのはよくない。

したがう／したがった／したがおう等

(i) 大きくなるにしたがって親を無視するようになった。

＊したがわない／＊したがう／＊したがった等

- 8) 「～に先立って」は、用言に接続する際「の」を必要とするとする立場(藤田・山崎(2001))と、必要としないとする立場(グループ・ジャマシイ編(1998))があるため「の」を()に入れて記載した。
- 9) ただし③4は、「～にかけても」と、「も」を入れれば許容度が上がるように思われる。
- 10) ③9も「～につけても」と、「も」を入れると許容度が上がるように思われる。
- 11) 森田・松木(1989)には「ある特定の体言を受けて慣用的に用いられることが多い」とある。

参考文献：

- 金子尚一(1983)「日本語の後置詞」『国文学 解釈と鑑賞』第48巻 6号 pp.133-146
- 木下直子・黒羽友子・樽田ミエ子・中村フサ子・増倉洋子(1995)『辞書で引けない日本語文中表現』北星堂書店
- グループ・ジャマシイ編(1998)『日本語文型辞典』くろしお出版
- 国立国語研究所編(1951)『現代語の助詞・助動詞－用法と実例－』秀英出版
- 鈴木重幸(1972)『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 砂川有里子(1987)「複合助詞について」『日本語教育』62号 pp.43-55
- 高橋太郎(2003)『動詞九章』ひつじ書房
- 塚本秀樹(1991)「日本語における複合格助詞について」『日本語学』vol.10 3月号 pp.78-95
- 永野 賢(1953)「表現文法の問題－複合辞の認定について－」金田一博士 古稀記念論文集刊行会編『金田一博士古稀記念 言語・民俗論叢』pp.95-120 三省堂
- 日本語教育学会編(1982)『縮刷版 日本語教育事典』大修館書店
- 福島泰正(2002)「複合助詞の認定をめぐる問題点－日本語教育の立場から－」『言語学論叢』岡山大学 9 pp.35-57
- 藤田保幸・山崎 誠(2001)『現代語複合辞用例集』国立国語研究所
- 松木正恵(1990)「複合辞の認定基準・尺度設定の試み」『早稲田大学日本

語研究教育センター紀要』 2 pp.27-52

森田良行・松本正恵(1989)『日本語表現文型 用例中心・複合辞の意味と用法』アルク

用例出典：

『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』所収

- (嵐が丘)：嵐が丘
- (一瞬)：一瞬の夏
- (女社長)：女社長に乾杯！
- (風に)：風に吹かれて
- (国盗り)：国盗り物語
- (こころ)：こころ
- (コン)：コンスタンティノーブルの陥落
- (さぶ)：さぶ
- (車輪)：車輪の下
- (新源氏)：新源氏物語
- (人生)：人生論ノート
- (太郎)：太郎物語
- (月と六)：月と六ペンス
- (楡家)：楡家の人びと
- (パニック)：パニック・裸の王様
- (ブン)：ブンとブン
- (モオ)：モオツァルト・無常という事

その他（ホームページについては全て2005年5月取得）

- (藤田他)：藤田保幸・山崎 誠(2001)『現代語複合辞用例集』の例文より
- (個人)：インターネット上にあった個人のホームページ
- (コリ)：コリジェントシステムズ(株)のホームページ
http://www.corrigent.co.jp/CS_company.html
- (信州)：信州大学医学部のホームページ
<http://www.md.shinshu-u.ac.jp/escell/12.PDF>
- (OCN)：OCNのホームページ www.ocn.ne.jp/adsl/flets/faq/

いけがみ もとこ（留学生センター非常勤講師）

A study of phrasal particles

– Differences between the *te*-form and the stem form –

IKEGAMI, Motoko

In Japanese, there are phrasal particles composed of case particles and verbs, like *~ni kanshite*, *~ni taishite*, *~o tsujite*, *~o megutte* etc. Most of them have both a *te*-form such as *~ni kanshite* and a stem-form such as *~ni kanshi*. Concerning the two forms, stylistic differences have conventionally been the only issue discussed. This paper, however, points out other differences, as follows: 1) *da* / *dearu* cannot be attached to the stem-form of these phrases; 2) some particles (*no*, *toritate*-particles *wa*, *mo*, *koso*, *sae*, *shika* etc., conditional particle *nara*, and case particle *yori*) cannot be attached to the stem-form. However, not all *te*-forms of these phrases are free from these restrictions. This paper examines the *te*-forms of each phrase from this respect and discusses the restrictions when apply.